０９／０１／２５　礼拝メッセージ　　曽我真人　兄

主　　題：重荷の解決法
聖書箇所：ガラテヤ人への手紙　６章１－５節

泉佐野聖書教会のためにお祈りくださり感謝します。英会話と去年のクリスマスの報告を祷告カードに、写真を掲示板に貼らせていただきましたのでご覧ください。たくさんの子どもたちが教会に来てくれています。英会話クラスには、実際、泉佐野の礼拝に来られている人たちよりも多くの子どもたちと保護者の方たちが教会に足を踏み入れてくださっています。それは非常にうれしいことで私たちの喜びであると考えさせられます。クラスは毎週土曜日にあるので昨日もクラスがありました。とても寒い日でしたが、たくさんの子どもたちと保護者の方々が来てくださり、保護者の方はずっとクラスに出てくださるので、みことばを聞いていただく機会も与えられごいっしょにすばらしい時間を持つことができています。このような土曜日の午後は私にとってとても楽しみであり、また、喜びの時です。皆さんは先週一週間、どのようなことがあったかすぐに思い出されますか？多分、昨日のこともう覚えていないと言われる方もおられるかもしれませんが、細かいことは別にして、例えば、皆さんの心の中にこのような思いがあったかどうか少し考えていただきたいのです。それは「愛」、「喜び」、「平安」、「寛容」、「親切」、「善意」、「誠実」、「柔和」、「自制」です。これらすべての思いがなかったとしても、皆さんが一週間歩まれて来た中で、そのような思いを持っておられたでしょうか？これらは皆さんもよくご存じの通り「御霊の実」です。私たちクリスチャンが御霊によって導かれる時、そのような実を実らせて日々の歩みをして行くことができると、みことばは教えているのです。そうであるなら、皆さんの一週間を考えた時に、例えば、もし今見た御霊の実が一つもなかったなら、それはクリスチャンとして非常に危ない状況であると言えます。なぜでしょう？その人は御霊とともに歩んでいないからです。もし、その人の先週一週間が自分中心、自分勝手な歩みであったなら、そのような御霊の実をもたらすことは決してないからです。

◎御霊の働きを止めてしまうもの―「重荷」

御霊の働きを止めてしまうものの中に「重荷」があります。例えば、皆さんは「重荷」と聞くとどのようなものを考えられるでしょう？一般的に、重荷を負った人とは耐え難いほどの非常に苦しい負担を持っている人、辛さを持っている人と考えます。もうこれ以上耐えることはできないという状況にある人、そのような人が重荷を負った人であると言えます。聖書の中にも「重荷」ということばが出て来ますが、今日は特に二つのことばを見たいと思います。一つは「バロス」というギリシャ語です。それを聖書の中では「重荷」と訳しています。これは実際にどのような意味合いがあるかというと、「非常に重く負担になるものを持っている状況」です。重たくてつぶれそうな状態、そのような重荷を「バロス」と言います。もう一つは「フォルティオン」というギリシャ語ですが、これは「実際に担いでいる荷物、自分が担ぐ必要のある荷物」という意味です。分かり易い例で言うと、皆さんが学校に通っておられたときのことを考えてください。私自身、通学鞄には重い教科書を詰め込んで、それにお弁当も詰め込んで、ぱんぱんになった鞄をフウフウ言いながら持って学校に行った覚えがあります。学校に持って行く必要があるものは確かに教科書やお弁当です。教科書がなければ勉強できません。そのように学校へ行く時に必要なもの、確かに重たいものですが、それが「フォルティオン」です。担いでいる荷物、当然、担ぐ必要のあるもの、当然、持たなければいけないもの、それが「重荷」と使われているのです。

もう一つは、鞄に教科書などを詰めていざ出かけようとした時に、母親から「ちょっと悪いけれど、弟がお弁当を忘れて行ったから一緒に持っていってあげて」と言われたとします。自分の鞄はもうぱんぱんでこれ以上入らない、でも、何とか詰めなければいけないということで無理やり詰め込みます。重い上にさらに弟のお弁当が加わってフウフウ言いながら学校へ行くのですが、この持たされた弟のお弁当は本来持たなくてもいいものです。しかし、頼まれたゆえに持たざるを得なくなってしまった、それでより重たい思いをしているわけです。これが「バロス」、「重荷」と使われているギリシャ語なのです。

今日、私たち見て行こうとしているガラテヤ人への手紙６章には、ガラテヤの教会のクリスチャンたちに非常に多くの重荷がかけられていたことが記されています。偽りの教師たちが人が救われるためには信仰だけでは不十分である、割礼をしなければいけない、律法を守らなければいけないと言って、クリスチャンたちに「～しなければいけない、～ではいけない」と、本来、持つ必要のない重荷をどんどんかけて行くとい

う状況にあったのです。そして、その重荷ゆえにガラテヤのクリスチャンたちは、ある者は高ぶりを持ち、また、ある者は卑下するという状態でした。なぜでしょう？重荷を負わされて、人を見て、あの人は何もできていないけれど私はできていると高ぶってしまうのです。また、重荷を負って何もできていない自分を見た時、自分はだめだと卑下してしまうのです。そのような状況にあったガラテヤの人たちに対して、パウロはことばをかけます。ガラテヤ人への手紙６：１－５を読みますが、この中に「重荷」ということばが二つ出て来ます。先ほど「重荷」の二つの意味を話しました。**「どうしても持たなければならない荷」**と**「持つようにさせられた荷」**ですが、どちらの重荷に当るのかを考えてみてください。

「6:1 兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。
6:2 互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。
6:3 だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。
6:4 おのおの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。
6:5 人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。」

☆重荷の対処法

２節と５節に「重荷」ということばが記されています。今日はこの箇所から、クリスチャンは重荷に対してどのように対処するべきかということをともに学んで行きます。二つの面から見て行きますが、そのことによって私たちが重荷に潰されてしまうのでなく、本当にいきいきと御霊に満たされて歩むことができるように、そのようなクリスチャンになっていただきたいと願います。

１．互いの重荷を取り去り合う

一つ目は、クリスチャン同士、お互いの重荷を取り去り合うということです。２節に**「互いの重荷を負い合い」**なさいと、パウロはガラテヤのクリスチャンたちにこのように書き記しています。この「重荷」はどちらの重荷でしょう？先ほど話した、自分の持って行くべき教科書か、それとも弟のお弁当か、どちらでしょう？これは本来持つ必要のないお弁当に当る「バロス」という重荷が使われています。非常に重たいものを抱え込んでしまっている、そのような状況であることを見て取ることができます。だから、互いの重荷、本来背負うべきものではないもの、そのようなものを負い合いなさいとパウロは教えているのです。ここで**「負い合い」**とあることばは「運び去る、取り去る」という意味があることばです。その**「重荷を負い合う」**、つまり、互いに重荷を「取り去り合いなさい」とパウロは教えているのです。そして、このように互いの重荷を負い合うこと、互いの重荷を取り去り合うことがキリストの教えを成し遂げることになると教えています。**「そのようにして、キリストの律法を全うしなさい」**と言います。**「そのようにして」**とはどういうことでしょう？その前に書かれている**「互いの重荷を負い合う」**こと、「互いの重荷を取り去り合う」こと、まさに、このことがキリストの律法を成し遂げることになるとパウロは教えているのです。

また、**「キリストの律法」**とは何でしょう？**「律法」**と聞くと私たちも「～しなければいけない」という思いをもってしまうかもしれません。この「律法」ということばは、ある箇所では「法則」、「おきて」という意味をもつことばが使われています。つまり、イエス・キリストの法則、イエスが教えてくれたおきてであって、**「互いの重荷を負い合う」**ことによって、それを成し遂げる、守ることになると、そのように教えているのです。ヨハネの福音書１３：３４でイエスは**「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」**と言われました。イエスが与えた法則、教え、戒め、それは**「互いに愛し合う」**ことだと言うのです。**「互いに愛し合いなさい」**、まさに、これがイエスの律法、キリストの律法なのです。**「互いの重荷を負い合う」**ことが**「互いを愛し合うこと」**になると、そのように言うことができるのです。

また、ガラテヤ５：１３－１４でもパウロ自身が**「兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。:14 律法の全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という一語をもって全うされるのです。」**と記しています。つまり、**「重荷を負い合いなさい」**と言う前に、イエスが教えていたキリストの律法、キリストの教えをパウロ自身が明確に教えていたのです。**「愛をもって互いに仕えなさい、隣人をあなた自身のように愛しなさい」**と。このように**「互いに重荷を負い合う」**こと、重荷を取り去り合うこと、それはまさに**「互いに愛し合うこと」**である、**「愛をもって互いに仕え」**合うことだ、それによってあなたはイエスの教えを成し遂げることになると、そのように教えているのです。

１）どのようにして互いの重荷を負い合うのか？

では、具体的に皆さんはどのようにして**「互いに重荷を負い合い」**ますか？重荷を取り去り合いますか？そのことをパウロは１節で**「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」**と教えています。「兄弟姉妹であるクリスチャンたちよ」と、このように呼びかけたパウロは、**「もし」**ということばで話を始めて行きます。確かに、仮定の話をして行くのですが、それはクリスチャン一人ひとりが実際に実践して行くべきことをパウロは教えています。**「だれかがあやまちに陥ったなら、…その人を正してあげなさい」**、それが**「互いの重荷を負い合うこと」**、**「互いに愛し合うこと」**になると言うのです。ここで**「あやまち」**と書かれていますが、これは「溝へ落ちてしまう」、「踏み外す」という意味があります。また、聖書の中で使われている**「罪過」**ということばでもあるのです。人間は生まれながらに罪をもっているので、それゆえに、私たちは罪を犯してしまいます。それがここで使われている**「あやまち」**、**「罪過」**と言われるものです。エペソ２：１に**「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、」**とありますが、この**「罪過」**が**「あやまち」**ということばと同じです。**「あやまちに陥ったなら」**、ある状態に陥ってしまっている、つまり、罪を犯している状態です。また、**「陥る」**ということばは時には**「見捨てる」**という意味もあります。つまり、だれかが罪を犯しているのを見つけたなら**「正してあげなさい」**、それが**「重荷を負い合う」**ことになるというのです。

人が罪を犯すときはどのような状況にあるでしょう？確かに、罪を犯したゆえに高ぶったり、また、落ち込んでしまったりします。「あーぁ罪を犯してしまった」、また、その罪に気づかないときは私たちは高ぶった状態を保ってしまうこともあります。高ぶりや落ち込み、そのようなものが私たちの重荷となってしまう、だから、その重荷を互いに取り去る必要がある。ここでは**「正してあげなさい」**と言っています。この**「正して」**ということばは「完成する、補う」という意味をもっています。Ｉテサロニケ３：１０にこのことばが使われています。**「私たちは、あなたがたの顔を見たい、信仰の不足を補いたいと、昼も夜も熱心に祈っています。」**と、パウロはテサロニケのクリスチャンたちを思う時、**「信仰の不足を補いたい」**、つまり、完全な状態、元の状態に戻してあげたいと**「昼も夜も熱心に祈っています。」**と言います。何か罪を犯してしまって、それゆえに非常に落ち込んでいる人たちを元の状態に戻してあげなさいと、そのように教えているのです。

２）だれがそのことをするのか？

「正してあげなさい」、では、それはだれがするのでしょう？そのこともパウロは教えています。**「御霊の人であるあなたがたは」**とあります。つまり、**「御霊の人」**が兄弟姉妹の罪を**「正してあげなさい」**と言うのです。**「御霊の人」**と聞くと皆さんはどう思いますか？「あなたは御霊の人ですか？」と問われたなら「はい、そうです」と大きくうなずく人は少ないのではないでしょうか？なぜなら、**「御霊の人」**とは非常にすばらしいクリスチャンであり、初めに見た御霊の実をいつももって歩んでいる人であると考えているから、私はとてもそのような人ではないというのです。では、私はこのようなことをしなくてもいいのでしょうか？決してそうではありません。ガラテヤ人への手紙５：１６を見ると**「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」**とあり、また、１８節には**「しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。」**、２５節**「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」**と、確かに、このような人を**「御霊の人」**と言います。つまり、御霊によって生きている人です。しかし、パウロはこの前の４：６で**「そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父。」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。」**と言っています。つまり、神の子である一人ひとりには**「御霊」**が与えられているのです。クリスチャンひとり一人、どんな人でも**「御霊の人」**であると言うことができるのです。そうであるなら、皆さん、お互い同士、これらのことを為して行く必要があると言えるわけです。

「御霊の人である」すべてのクリスチャンは、だれかがあやまちの状況にあって、そのことを見たとき、知ったとき、その人を正しい方向へと導いて行くのです。皆さんはどうでしょう？そのことをしておられますか？これこそまさに**「互いに重荷を負い合うこと」**であり、**「互いに愛し合うこと」**だと言うのです。

３）どのような態度でするのか？

ここにはもう一つ大切なことが記されています。それはこれらのことをどのような態度でするのかということです。ここにおられるクリスチャンの皆さんはこのことをして行かなければいけないのですが、その時、どのような思いをもって、どのような心の態度でしなければいけないかということが教えられています。

（１）柔和な心で

「柔和な心で」と記されています。ここで使われている**「心」**ということばは、別の箇所では、御霊の「霊」

と同じことばが使われています。言い換えるなら、「柔和な霊をもって正してあげなさい」となります。そして、**「柔和」**はガラテヤ５：２３に出て来る「御霊の実」であって、御霊によって歩む人がもっているものだと言えます。**「柔和」**ということばを聞いて皆さんどのような人を頭に描かれるでしょう？確かに、いろいろな思いがあるでしょうが、「非常に優しい感じの人」と捉えるのではないかと思います。実際に、国語辞典を見ると「性質や態度などが優しくて柔らかいさま」とあり、それが私たち日本人が一般に考える「柔和」という意味でしょう。では、ここで言われている**「柔和な心」**、「柔和な態度」とはそれだけのものでしょうか？どのようなことがあっても優しく柔らかく接することが求められているのでしょうか？そうではありません。ある註解者はこの**「柔和」**ということばには三つの意味があると言います。一つは神のみこころに対する従順さ、神がイエスと言うならイエス、ノーと言うならノーと言う従順さです。二つ目は、教育の可能な人、高慢ゆえに学ぶことができない人ではないのです。ただ柔らかいだけではなく、へりくだって人から学ぶことができる人、それが**「柔和な人」**だと言うのです。三つ目は、思いやりのある人です。では、ここで言う**「柔和な心」**で接するとはどういうものでしょう？ただ何にでも「はい、はい、そうですね」と優しく接してあげることでしょうか？そうではなく、間違ったことは間違っていると明確に示すことができる人、それがここで言われる**「柔和な人」**です。でも、私たちが気を付けなければいけないことがあります。人の間違いを指摘する時、私たちはつい高ぶったり、高慢になってしまいがちです。しかし、柔和な人は、確かに、間違ったことは明確に正してあげるのですが、そのことを優しい態度、柔らかな態度をもって、過ちを正しく示し、正しい方向へと導いて行きます。皆さんはどうでしょう？人を正してあげる時、そのような思いをもって為しておられるでしょうか？今見たように、このようにすることが**「互いの重荷を負い合うこと」**になるとみことばは教えているのです。

４）自分自身も誘惑に陥らないように気をつける

もう一つ**「互いの重荷を負い合う」**ために必要なことが記されています。１節の最後**「また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」**。この**「気をつける」**ということばは「見張る、しっかりと目を留める」という意味があります。つまり、皆さんも私自身も確かに**「御霊の人」**ですが、誘惑を受けて罪を犯してしまうこともあります。もし、だれかが罪を犯しているなら、その人は互いの重荷を負い合うことはできません。ゆえに、私たちがするべきことは自分自身が本当にどのような者か、罪に陥っていることはないか、誘惑に惑わされているようなことはないかと、そのことをまずしっかりと見張っていなさい、しっかりと自己吟味をしなさいと、そのようにパウロは教えるのです。そして、それによって**「互いの重荷を負い合い」**、キリストの律法、つまり**「互いに愛し合いなさい」**という教えを成し遂げることができると教えているのです。クリスチャンの重荷の対処方法の一つは「互いの重荷を取り去り合う」ということです。

２．自分の責任を果たす

「互いの重荷を負い合う」というと相手に負わせるだけで自分自身は何もしなくてもいいのでしょうか？決してそうではないとパウロは続けて教えてくれています。クリスチャンの重荷の対処法の二つ目ですが、それは「自分の責任を果たす」ということです。確かに、重荷は互いに負い合うわけですが、同時に、私たちは神が私たちに与えておられる責任をしっかりと為して行かなければいけないと言います。５節に**「人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。」**と記されています。つまり、各々が果すべき責任があると教えているのです。ここで使われている**「重荷」**ということばが、先ほど見た「フォルティオン」で、実際に担いでいる荷物、担ぐ必要のあるもの、つまり、先の例では自分の教科書に当ることばです。一人ひとりに為すべき責任が与えられているということが教えられているのです。学校に行く時、私も経験のあることですが、学校に教科書を置いて持って行かない人もいたでしょう。本来、学校へは勉強をするために行くのだから、自分の勉強道具は当然、自分が持って行かなければいけないものです。だれか他の人が持って行ってくれるということはありません。自分が学ぶものは自分が持って行く、つまり、自分がしっかり責任を果たさなければいけないのです。だから、ここに**「人にはおのおの」**とあるのです。つまり、ここにおられる皆さん一人ひとりにもそれぞれの自分自身の重荷、責任がある、それは自分が為して行かなければいけないと教えるのです。

１）どのように自分の責任を果すのか？

では、どのように自分の責任を果たそうとするのか、ここには書かれていませんが、３節のところを原文で見ると、ここにも「もし」ということばが使われています。１節で見たように、また仮の話をするのですが、そのように実際にするべきであるということを示すのです。そして、５節にも原文には「なぜなら」と

いう接続詞が用いられています。３節、４節の理由として５節が書かれているのです。３－４節に記されているような者であるなら、負い合うべき自分自身の重荷があると言うのです。では、実際に「自分の責任を果たす」とはどのようなことかを見て行きましょう。

（1）自分自身のことをよく知る

３節に**「だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。」**とあります。**「りっぱ」**と思わせることは何でしょう？例えば、皆さんが自分のことを誇るとするならどのようなことがありますか？何かすばらしいものを得たときや人から称賛を受けたときなどは、確かに、私たちは誇らしく思います。私はこのようなものを持っている、皆がこんなにも誉めてくれていると思うときは、確かに、少なからず誇らしい思いをもつのではないでしょうか？「あなたは本当にすばらしい能力を持った人ですね」、「本当に賢い人ですね」などと言われると、「自分はりっぱなのかな」という思いをもってしまうでしょう。そうであったとして、その私たちがもっている力や能力は本当に自分のものでしょうか？それが自分自身のものであるなら、確かにこのようにりっぱであると誇ることができるかもしれません。でも、そうではないのです。Ⅰコリント４：７に**「いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」**とパウロが書いています。私たちが持っているもの、力や能力、その他のすべてのものは**「もらったもの」**です。また、同じⅠコリント８：６に**「私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです。」**とあります。つまり、すべては主によって今あると言うわけで、私たちの存在そのもの、私たちの持っている力や能力というものも、すべて主のものであると言うのです。それなら、私たちにはりっぱだと思うようなものは何一つないのです。もし、そのように思うのであれば**「自分を欺いているのです」**。なぜなら、自分は何も持っていない、持っているものはすべて神から与えられたものであるのに、それによって自分がりっぱであると言うなら、まさに聖書が言っているように自分を偽っている、**「自分を欺いている」**からです。すべてのものが与えられていると思うなら、そこには先ほど見たような高ぶりや卑下というものがありません。つまり、重荷を感じるものでなくなると言えるのです。

（2）ほかの人と比較するものではない

また、もう一つパウロが教えていることがあります。ほかの人と比較すべきではないということです。４節で**「おのおの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。」**と言っています。私たちはだれかほかの人と比較してつい誇ってしまうことがあります。特に、その人が何か自分よりも劣っていたり、また、間違ったことをしてしまったことを見て「私はあのような人ではない」と言って自分を誇ってしまいます。だから、ほかの人と比較する必要はない、もし、比較するならそれは間違っていると言うのです。ここで使われている**「よく調べてみなさい」**ということばは、自分の行ない、つまり、自分が日常行なっている歩みをよく調べること、特に、ここでは「調べて正しいと認める、確認する、確かめる」という意味ですから、そのようにしなさいということです。ただ調べるだけではなく、本当にそのとおりであるということを認めるのです。そして、**「誇れること」**と書かれていますが、ある辞書には「勝ち誇って喜ぶ理由」とありました。つまり、何かを誇るときは心のうちに喜びをもってしまうのですが、その喜びをよく考えてみなさい、それは自分だけのものでしょうと言うのです。確かに、自分を人と比較して、何かを誇って、高ぶって、喜びをもつかもしれません。でも、自分自身の行ないだけを見てよく考えたときに出てくる喜びというものは、本当に自分だけのものではないでしょうか？それゆえに、ほかの人に誇れるものは何もないと、このように言うのです。

ルカの福音書１８：９－１４でイエスがパリサイ人と取税人の祈りについて話をされています。**「自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。:10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。:11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。:12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』 :13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』 :14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」**。パリサイ人は人と自分

を比較しました。取税人を見て「あれは普段悪いことをしている者だ、私はあのような者でないことを感謝します」と、つまり、比較をするときはこのような思いをもってしまうのです。でも、取税人はどうしたのでしょう？**『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』**と言いました。彼は自分の歩みをよく吟味して考えた時、自分の罪深さを理解したゆえに「こんな者をどうぞ神さまあわれんでください」とそのような祈りを神にささげたのです。

私たちが普段していることを考えた時、それは私たちが本来するべきこと、当然すべきものであることが多くあって、私たちがそれをしたとしても何ら誇ることではありません。同じルカ１７：７－１０にはしもべの話が出て来ます。**「ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい。』としもべに言うでしょうか。:8 かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい。』と言わないでしょうか。:9 しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。:10 あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」**、つまり、私たちが当然なすべきことをしても、そこには何一つ誇るものはないのです。「ただなすべきことをしました」ということばしか出て来ないのです。

「おのおの」、つまり、皆さん一人ひとりになすべき責任が与えられていると言います。例えば、夫であるなら家族を正しく導いて行くという責任があるでしょう。また、妻であるならその夫をしっかりと支えて行くという責任があるでしょう。そして、子どもであるなら、親を敬うという責任があります。また、働いている人なら、会社に仕えるという責任があります。学生ならしっかり勉強するという責任があるわけです。それはだれかがしてくれることではなく、一人ひとりに与えられた責任です。そして、それを怠けてしまうとどうでしょう？学生であって勉強が余り好きではない人にはそれが苦痛だから、もう今日はいいと思ってしまって、それがどんどん溜まって来ると、試験前になってから「さあ、困った！もうどうしようもない、どうしよう！」と重荷に押しつぶされそうになるのです。でも、本来、毎日なすべきことをしっかりとしているならそれは持つ必要のない重荷です。仕事上でも、毎日すべきことをしないで、もう今日はこれでいい帰ろうと、そのような毎日を歩んでいるなら、ある時にそのしわ寄せがやって来ます。そうではなく、毎日しっかりと与えられたものをこなして行くなら、重荷を負う必要はないのです。つまり、一人ひとりに与えられている責任は、一人ひとりがしっかりと為して行く必要があるのです。それは皆さん一人ひとりに与えられたものであって、だれがしてくれるものではないのです。あなたが為すべき責任があるものはあなたがしなければいけないのです。それがここで言われている**「負うべき自分自身の重荷」**、自分の重荷を負うということです。

さて、皆さんはこの「重荷」というものにどのように対処して来られましたか？私たちが御霊に満たされて歩むためには、その障害となる「重荷」を取り去る必要があるのです。ここで見たのは、確かに、罪から出て来るものですが、それをまず互いに取り去り合いなさい、そして、まさにそれがイエスが命じておられることだということです。そして、それだけではなく、皆さん一人ひとりに神が与えてくださった責任をしっかりと成し遂げて行きなさい、そうするとき、皆さんは御霊によって歩み、「愛」、「喜び」、「平安」、「寛容」、「親切」、「善意」、「誠実」、「柔和」、「自制」という御霊の実を実らせて日々を歩んで行くことができると教えているのです。

ぜひ皆さん、どうぞ今週一週間、御霊に満たされて歩んでください。